陸軍幼年学校の生活が日本陸軍の価値観形成に与えた影響についての考察

和田　恵

本稿では日本陸軍における価値観の形成に対して陸軍幼年学校の生活が与えた影響について、主に陸軍幼年学校改革以後における幼年学校の教育機関としての機能の評価、幼年学校における生徒の生活や人間関係、陸軍士官学校入学以降における中学校出身者と幼年学校出身者の関係などの観点から考察を行った。

日本陸軍幼年学校は、将来の陸軍将校を育成するために設立された特殊な教育機関であり、明治 29 年の改革によりエリート制度として機能した。この改革以降、幼年学校出身者のみが軍の幹部となることが可能になり、日本の階層制度に大きな影響を与えた。改革の背景には、幼少期から精神教育を施し、天皇制国家への絶対服従を根付かせる目的があった。この制度は「国民皆兵」の原則に反するという批判を受けたが、陸軍は中学校教育の問題点を指摘し、幼年学校の必要性を主張し続けた。

教育内容は、中学校と類似しつつも軍事的必要性に特化し、倫理、国語、歴史などの科目で天皇制を強調した。一方、理科や数学は客観的事実に基づき、軍事に応用できる実践的な教育が行われた。また、訓育部では身体鍛錬とともに軍人精神の育成を目的とし、規律と命令の重要性を教える教育が実施された。こうした教育でエリート意識を醸成した幼年学校出身者は、一般的に中学校出身者を下に見る傾向があった。

生活面では、上級生が下級生を指導する「模範生徒」制度があり、将来のリーダーシップを実践的に学ばせた。しかし、模範生徒と下級生の間では私的制裁や不適切な指導が問題視され、生徒監による調整が行われた。全体として、幼年学校の合理的かつ厳格な教育は、軍の中枢で活躍する人材を効率的に育成した一方で、偏った価値観や上下関係の歪みも助長した。

総体的には、幼年学校におけるエリート意識を醸成する教育は、日本陸軍における盲目的な権力の性質を生み出すことにつながったと考えられる。